

特集

「対人援助学としての臨床社会学の展開にむけて」

対人援助の諸分野を対象にして、他者の声を聴き、関係性の成り立ち具合を記し、社会の結節をそこに解説し、個人の体験を言葉にしていく協働作業（被調査者＝当事者と研究者）としてとりあえず臨床社会学をとらえている。まだ、共有された定義はない。臨床社会化している事態の社会学的研究という場合もあるし、臨床実践の社会学的な研究という場合もある。こうした緩やかな合意のもと、臨床社会学部会として、人間科学研究所の学術フロンティア推進事業「対人援助における人間環境デザインに関する総合的研究」プロジェクトのなかで研究をすすめてきた（2000年度から2004年度）。さらに、人間科学研究所オープンリサーチセンター事業「臨床人間科学の構築」プロジェクト（以下、臨床人間科学オープンリサーチセンター。2005年度から2009年度）でも臨床社会学プロジェクトとして研究をおこなう。

他者の声を聴くという意味では質的社会学とでもいえるし、関係性の成り立ち具合を記すという意味では社会的相互作用分析とでもいえるし、社会の結節を解説するという意味では構築的（構成的）社会理論とでもいえるし、個人の体験を言葉にしていくという意味ではインタビュー調査やライフストーリーともいえる。また、協働作業という意味では、当事者と共に創る対人援助学あるいは当事者研究ともいえる。

とくに、対人援助の諸分野は、こうしたことに格好の素材で満ちあふれ、主題が実に豊富にある。資源と人材とをどのようにして配分するかという社会制度のデザインから臨床的な援助実践事例の、つまり、マクロからミクロにわたるまでの幅広いスペクトラムのなかにこうした臨床社会学的な主題を見だし、対人援助学の創造に資するということがねらいである。ここに掲載したのはそうした部会での個人研究の成果の一部である。それぞれの主題は異なるものの、こうした関心を共有している。障碍のある子どもとともに生きる家族の経験から導出した社会的なケア分有上の課題（中根成寿）、不妊治療経験と家族の再構成を分析する新しい質的研究方法の提案（安田裕子）、親子関係という私的領域への公共政策による介入の諸問題（斎藤真緒）、少子社会における生殖をめぐる再政治化の描写（松島京）として論考が寄せられている。

対人援助を描く臨床社会学として、「他者の声を聴き、関係性の成り立ち具合を記し、社会の結節をそこに解説し、個人の体験を言葉にしていく協働作業」という視点が四つの論考にそれぞれ濃淡はあれ活かされている。さらに、多様な主題と題材をもとにして臨床社会学的な研究を続けていきたいと思っている。

臨床社会学プロジェクト代表 中村 正（立命館大学大学院応用人間科学研究科）